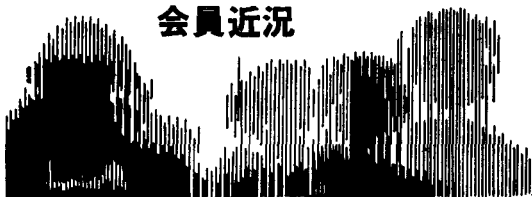


会員近況



鉄道技術研究所
自動制御研究室

塩谷 明男

鉄道の貨物輸送にはいろいろな行先の貨車を集め同一方面別のいくつかのブロックに仕分け、同じ方面行きの貨車別にまとめて列車単位に組み立てる貨車操車場というのが全国の主要都市の近くににあります。この操車場での貨車の入換えを効率よく行なうための手順に組合せ問題があり、また荷主との貨物の授受を行なう貨物駅で列車に連結解放される貨車の各両数を途中停車する駅ごとに各何両ずつにしたら最も輸送効率が高まるかを決定するのに整数計画法が考えられ、東京に隣接する武蔵野操車場の設計に際し、小生はこれらをとりいれ、その一部が利用されています。

その後、計測担当となり、列車の途中脱線防止のための装置で、列車が走行中、車両の動特性をリアルタイムで計測し、その異常を指摘するもので、これは全国に12基実用化しました。

今現在は57年6月と11月に開業予定の東北・上越新幹線の車輪を診断するシステムと、青函トンネル内の列車火災を事前に予知するシステムの設計を行なっていますが、測定精度を高めるためのデータ解析処理法に日夜苦勞している今日この頃です。

日本電気
情報処理海外事業推進本部

南郷みどり

さる7月より3カ月、中国科学院からACOSソフトウェアの研修生を受け入れて面倒をみました。平均年齢は39.5才と高く、初対面の時に、「文革の影響で若い人は勉強していませんので私たちが参りました」と挨拶されました。日本では情報産業の分野では20代後半から30代前半の青年がたくさん活躍しています。中国では、その年代に当たる若者の大半は基礎教育を受ける機会が与えられなかったわけで、貴重な人材を失ったことになりましょう。

Vol. 26, No. 1の中国訪問記の三根久先生と同じく、私も中国の大連が生まれ故郷です。今度、その生まれた国で働くことになりました。今春、北京に新設される日

中ソフトウェアセンターに勤務するために、近く日本を離れます。センターではソフトウェアの教育を担当いたします。今までOR学会は会費を収めているだけの会員でしたが、今度はORを活用する場があるかも知れません。

広島大学経済学部 岡本 雅典

私自身がOR会員になったのはOR学会発足後1、2年経った後であったかと思う。会員近況を書くに当たって、その頃なぜOR学会員になったかを反省してみた。当時はOR活動とその研究に全体として何か熱気のようなものがあって、その熱気あるいは毒気に当てられて入ったのかも知れない。何を研究テーマとするかそれほど判然としておらず、なんでも研究の対象となった。そのうちに体系化され、ORの学問ができあがってくるとまらなくなってきた。

OR学会に何も貢献することもせず、といて辞めることもせず今日にいたった。今年こそは退会しようといつも年末に会費を払うとき思うのであるが、有力なOR学会に退会したいと言ったら、黒枠付で名前とともに哀悼の意を表わされるから、それは止めたほうが良いと言われて、これまたケチョン。

ところで要はORであろうとなんであろうと研究すればよいので過去10年間、土・日曜が嬉しい研究時間という忙しい大学生活の中で、気象災害に関する統計的研究を行なってきた。特に最後にやった土質と風化度、地形(斜面方位、谷密度)等を固定因子と考え、これに時々刻々と変わる雨量分布を重ね合わせて大雨による土砂崩壊危険度の地域的予測図を作った。データを投入すればコンピュータによりCRT上で監視できる。これはある意味でOR研究の一部に入るかも知れない。一方、社会的因果性の研究に関連して、ファジー言語の関係をを用いて弱い含意の強度を示す指数を作った。もっかのところ統計的推論と弱い含意による推論との“距離”をうまく表わせないかと日夜考えている。もともと私は気象学の研究者であったが、予報あるいは予測に非常に興味をもち、統計学を勉強するために数学の勉強をした。昭和ひとけた生まれの多くの統計家はほとんど独学で統計学ないし数理統計学を学んできている。日暮れて道遠しの感にいつもつきまといられるのだが、とにかく統計学の研究が現在の専門領域である。データの解析の中から新しいアイデアをとり出し抽象化し、1つの統計的モデルまでに発展させることを常に心から願っている。このためコ

ンピュータとはできるだけ仲よくしているが、裏切られることがきわめて多い。やはり理論的によく考えることの必要性を痛感する。現在の経済学部での研究は刈り込み系列による景気動向指数の作成である。現用のものと比較すると先行・一致・遅行系列の各時系列的特徴をはっきり示すことができる。

シェル石油(株)広島支店 浜崎 宏

ORにたずさわってすでに18年になり、民間企業でORマンとしての自覚をもち続けるむずかしさを痛感しています。今まで手がけたテーマは需要予測、計量経済、消費行動分析、地域分析、製品企画、物流システム、チャンネル再編成、価格効果、公害、工場立地、等です。業界環境変化、組織変遷の中でニーズも変わり、使用するコンピュータも、中型、超大型、TSS、マイコンと大きく変化してゆき、自家製プログラムもライブラリー化していきました。

現在興味を感じているのは、企業利益拡大のための販売力の追求(どうしたら売れるか)ということと、特約店網を中心とした財務内容充実のための経営分析です。これらはORというよりもシステム分析、人間行動分析が中心ですが、なんらかの最適解、共通解が求められればと考えています。

編集後記▶新年の忙しさも一段落し、定常状態にもどったことと思います。「1月居座る、2月は逃げる……。」という言葉が肌で感ぜられます。▶この言葉に示されるように人間の感覚は物理的な尺度とは異なるようです。感覚が基となり形成された不可思議な世界観が人間行動を支配しており、人間行動の研究は昔からの社会科学の中心的課題となってきました。ORも解の実施を含めて考えると人間の問題は不可避となります。そこで、今月の特集は「人間の行動モデル」.人間行動をシステム理論の

最後に地についた「日本的マーケティングOR」のますますの発展と、応用科学たるORが自覚をとりもどし、同学の土がふえることを期待しています。

西日本鉄道(株) 電子計算部営業課 福田晋一郎

ORの教育を受けてから15~6年たった。企業の問題を1つでもORで解決できれば上出来だと先生に教わった。当時はその意味がよく理解できなかったが、今になってなるほどと思う。企業の中に問題らしきものはたくさんある。しかし、それらの制約、条件等を整理して、1つの問題にまとめることすら大変だ。途中で投げ出しちゃうのが関の山である。

しかし、ORの知識、考え方がまったく無駄であったとは思わない。日常の仕事でずいぶん無理、無茶な問題に出会うことが多い。その時に、何か解決法があるはずだ……と、その問題の解の存在を信じ、とにかくいろいろやってみる。結果は最適解にほど遠いかも知れないが自分なりに何か結論をだすという考え方が私にとって非常に役に立っている。

現在のところ、コンピュータ部門で情報処理サービスの仕事にたずさわっているが、競争の激しい業界で、いかにして市場占有率をあげ増収をはかるかが当面の課題である。

立場から捉えた松田正一先生の理論にもつづいた応用例の紹介です。本号に掲載した事例以外にも多くの現実問題への応用例があるとのことですが、頁数の都合で割愛せざるを得ませんでしたこととお詫びします。▶モニター委員をはじめとして本誌に対するご意見をいただくのですが、編集委員の立場からすると、意外と会員各位からのご意見が少ないことが気になります。レーダー無しで暗礁海域を航海しているような不安感があります。遠慮のないご意見、ご希望をお寄せください。(M)

オペレーションズ・リサーチ

昭和57年2月号 第27巻(新シリーズ第7巻) 2号 通巻254号

代表者 松田武彦

発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
(電話 03-815-3351~2) 〒113

編集人 小林竜一

発売所 株式会社 日科技連出版社
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 〒151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ

定価 850円(郵送料含)年間予約購読料 9600円(郵送料含)

本誌への広告お申し込みは明報社(571-2548)、日経弘報社(563-2241)へ